

荻原裕幸歌集

『永遠よりも少し短い日常』

(書肆侃侃房)

この歌集を読んで、「ニューウェーブ」という括りで、荻原裕幸の歌を読んでいては、もう荻原の歌の世界の豊穡さは味わえないことを痛感した。また短歌は抒情詩であるということも改めて思い知らされた。次々に目の前に現れる抒情に満ち満ちた歌は、おのずと陶醉すらもたらしてくれるのである。例えばこんな歌。

だれを乗せてあるか九月の雲の船がわたしの窓にしばらく泊まる

私のかたちをゆるく避けながら湯はゆふぐれに淡くふくらむ

二首目の漢字を避けて、あえて平仮名を用いているところは絶妙と言える。言葉をおもしろく歌でもある。

なぜかこの歌集には、妻の登場する歌が多い。私小説的とは思いつつ、これもまた荻原の次の一手かなとも思った。

たましひの溢れる音をさせて妻が小壇に詰めてある春の壇

冬のひざし浴びればむしろ冷えてゆく妻と静かな古都を旅して

(鈴木 竹志)

前田康子歌集

『おかえり、いつてらっしゃい』

(現代短歌社)

日常のささやかなものや社会でひっそりと生きている命に近づき、同じ高さからまなざしを向けた第五歌集だ。

大き蝶ほどすぐ逃げてゆき足もとにじつとしていた蜆蝶は

草の歌私が詠まねば誰が詠む えのころぼんぼん電柱を打つ

舐められてやがて言葉になりてゆく速度思えり点字亜鉛版に

忘れられがちなものの存在、人のまなざしが向かないものを自分が歌おう、自分だけでもその存在を認めようとする表現者の姿勢がこれらの歌から窺える。

二人の子どもが巣立ち、義母を看取り、自分自身にも老いの兆しや体の不調が出てくる。そのような変化のときにあつて、柔らかに鋭く生を捉える。

ふつつつと義母眠る時台所に蟻列なすを我はつぶしいつ

家中の刃物がこちらを向いているよう術後の身体丸めて眠る

俯瞰する視点、焦点に迫る視点の両方を

持ち、命に迫る一冊。

(斎藤 美衣)

三原由起子歌集

『土地に呼ばれる』

(本阿弥書店)

『ふるさととは赤』に続く第二歌集。福島県双葉郡浪江町出身の作者が、震災と原発の事故後、「復興」の名のもとに形を変え、故郷に想いを寄せて詠う。

それぞれに立つ位置はあり代弁者などいないこと知る 二年経て

「まだなにも終わっていない」東京の雑踏歩けば叫びたくなる

復興は「なかつたこと」の連続で抛り所なきふるさとになる

東京に移り住みながらも、作者の心は故郷に向く。三首目の「なかつたこと」の解釈は読者に託される。抛り所であった母校や街を「なかつたこと」にする復興が、進んでいくことに戸惑い、葛藤する。

死化粧を施されし十年で一番美しき母校あとにす

足首に巻き付けられし銅像の「のこすさわるな」黄色のテープ

母校が壊されるが、銅像を残すために貼られた黄色のテープは、次世代に故郷を繋ぐ襷に感じられたかもしれない。土地に呼ばれた作者の想いが届く。

(椎名 恵理)